

54 田代三喜が中国から持ち帰ったといわれる『大徳濟陰方』の検討

○遠藤 次郎・中村 輝子

田代三喜は十二年間の中国留学の後、『全九集』と『大徳濟陰方』を持ち帰ったといわれている。すでに我々は『全九集』については検討を加えた。本研究では、『大徳濟陰方』について検討し、両書を比較検討した。

本研究で用いた資料は京都大学富士川文庫所蔵の『大徳濟陰方(延宝八年刊)』であるが、本書には編年、編者、序文などの記載がない。しかしながら、幸いに、江戸時代後期に奈須恒徳は序文などが附されている本書を見ており、『本朝医談』(文政五年刊)に序文および医案を引用している。これによると、『大徳濟陰方』は景泰六年(一四五五)に月湖により編纂されたことになっている。月湖は景泰三年に『全九集』を編纂したといわれているので、その三年後ということになる。

富士川文庫の『大徳濟陰方』は四巻よりなり、婦人の衆疾、妊娠、出産、産後の病、と婦人科の病全般を幅広く網羅している。本書を検討した結果、本書は陳自明の『婦人大全良方』(二三三七年)の節略本であることが明らかになった。また、『婦人大全良方』にはいくつかの系統の版本がみられるが、『大徳濟陰方』の引用の中に「補遺」の部分が見られることから、原本は熊宗立編刊の『婦人良方補遺大全』(一四四〇年初刊)であることも明らかになった。

『大徳濟陰方』の最初には『婦人大全良方』にはない総説が記されている。この総説は『全九集』の婦人門の初めにも見出され、引用文の前後関係から、これは方賢の『奇効良方』(一四四九年序刊)中の文章を断片的につなぎ合わせたものであることも判明した。

『注能毒』(初代道三述、玄朔校訂)に「唐より渡りたる濟陰方」と記され、また、『当流医学之源委』に、「盛紹(道三の孫)に『大徳濟陰之秘訣』を書き与えた」と記されていることから、曲直瀬道三が『大徳濟陰方』を手に入れたことはほぼ間違いない。

『大徳濟陰方』と関連させながら、道三著『啓迪集』の婦人門を見ると興味深い事実に出くわす。『啓迪集』には『婦人良方』からとして(巻末の「所従証経籍」による)、六一回の引用が見られるが、これらは全て『大徳濟陰方』に含まれている。また、『婦人大全良方』には見られない「総説」も引用されていることから、道三が参考にした『婦人良方』は『大徳濟陰方』であることが明らかにになった。また、このことから、道三は恐らくは『啓迪集』の編纂時には『婦人大全良方』を手に入れることができず、節略本の『大徳濟陰方』で間に合わせたものと推定した。

次に『大徳濟陰方』と『全九集』の婦人門を比較した。『全九集』婦人門の条文も、その大半は『婦人良方補遺大全』からの抜粋である。これと『大徳濟陰方』を比較すると、両者に共通する条文とともに、共通しない条文も見出された。

我々は先の研究において、『全九集』の引用文献が一五三〇年以降に出版されたものを数多く含んでいることから、本書が仮名本『全九集』と同様、道三によって編纂

された、と推定した。ただし、道三が『全九集』の全てを編纂したのか、あるいは、原『全九集』が存在し、それに新しい医書を付加しながら、『全九集』を編纂したかについては、明らかにすることができなかった。

これに対して、本研究では、原『全九集』が存在していたことを示す次の事実を明らかにすることができた。すなわち、道三は『啓迪集』において『婦人良方』として『大徳濟陰方』を引用していることから、『婦人大全良方』を見ていないと考えられる。したがって、『全九集』における『婦人良方補遺大全』からの抜粋は、道三ではなく、原『全九集』の著者によって行われたとみることができ。今後、我々は原『全九集』について検討していく予定である。

(東京理科大学薬学部薬用植物・漢方研究室)